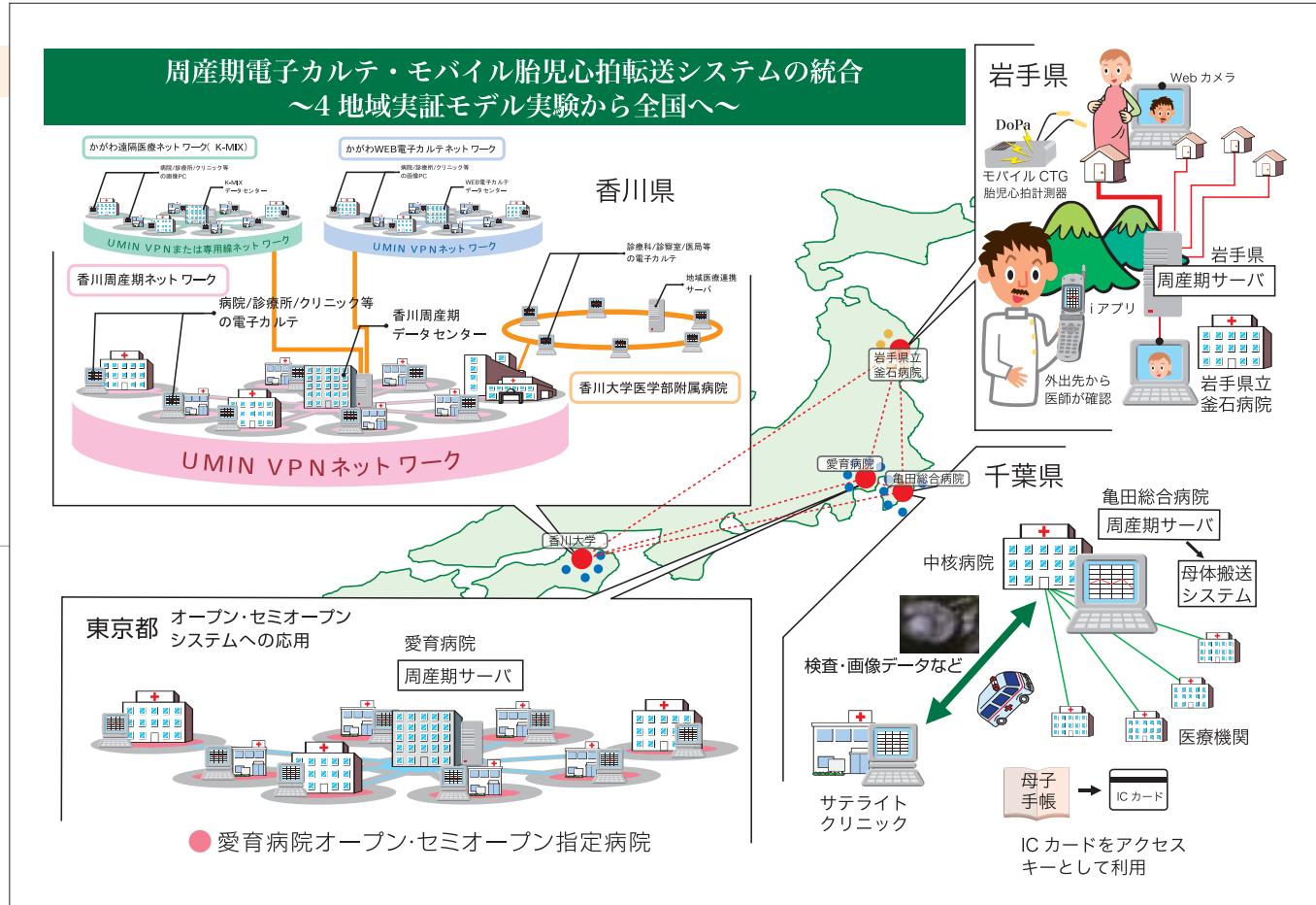


図2. 経済産業省 平成18年度「地域医療情報連携システムの標準化及び実証事業」



治験システムや レセプト管理なども次々とIT化

K-MIXはITを用いた臨床試験支援システム(治験ネットワーク)の開発にも活用されている。諸外国に比べて格段に高い日本の治験費を、ネットワーキングによって、効率的、高品質、しかも安価に実現しようとするものだ。

治験は、複数の医療機関、検査会社、CRO、製薬会社の間を多くのデータが行き来し、医師や薬剤師、看護師など多数の職種が関与するだけに、情報の標準化と安全性確保、そしてデータの真正性を保証するための電子認証、電子署名(HPKI)の技術が不可欠である。香川県では、すでに四国電力が認証局を稼働させており、医療用電子認証局(MEDIC-DC)との連携も計画されている。実現すれば、従来の

紙ベースの治験以上に正確な情報を短時間に収集できるため、その簡便さからより多くの医療機関の治験への参画を促すことができる。

さらに香川大学医学部附属病院では、電子カルテとレセプトのデータを併せて管理するシステムを2006年夏から実用化。紙で管理されていた膨大なレセプトがデジタルデータとなって、ネットワークに組み込まれている。

＊＊＊

今、医療現場の一部では、軽症でも大病院を受診する患者さんが増え、本来じっくりと時間をかけて診るべき患者さんへの対応が不十分になるとという現象が起きている。一方で、地方における医師不足には歯止めがかかるない。こうした現状だからこそ、ITを使った遠隔医療に大きな意義があると原先生は話す。

「K-MIXの目的のひとつは無医村

の解消です。離島の多い四国でも実際に効果を上げています。次に在宅医療。ケーブルテレビ回線やインターネットを使って、自宅で受診できるシステムは観察の必要な高齢者ケアに最適。かかりつけ医との連携も強化されます。加えて、専門家ネットワーク。自分が不得意な部分を、ネットワークを通じて得意とする専門家に聞くことで診断がより確かなものとなります。全国各地域の病院、診療所、家庭をネットワークするため、今後、解決すべき課題は決して少なくありませんが、香川県で産声を上げたシステムは十分その期待に応えられます」

医療へのITの導入は、いつでも、どこでも、誰でも、医療の恩恵を受けられる社会づくりを目的としている。原先生が学生時代から取り組んできた、医療とITをつなぐ研究は、今、大きな実を結びつつある。